新田雅章著

# 「天台実相論の研究」

福島光哉

## 一

隋の天台大師智顗の思想に関する部分的な研究は、今日まで多くの研究者によって進められて来ている。しかし、智顗の生涯にわたる佛教思想を総合的に把握した研究は意外に少なく、近年では佐藤哲英博士「天台大師の研究」(昭和三十六年)、安藤俊雄博士「天台学」(同四十三年)、関口真大博士「天台止観の研究」(同四十四年)を数えるのみである。こういった情況にあって、このたび新田雅章博士が智顗教学の中心思想に関する研究を公刊され、天台学に新しい研究方法を導入して、学界に大きな問題提起をされたことは、まことに意義深いことと云わねばならない。

## 二

本書は著者が東京大学に提出された学位論文の公刊であって、六百数十ページに及ぶ力作である。

はじめに本書の構成について紹介すると


序　章　著述と思想の時代的展開
第一章　初期実相論の体系
第二章　初期実相論の変容
第三章　実相論の新たな体系化
第四章　「三大部」における実相論の構造
第五章　晩年の実相論
——「維摩経疏」を中心として——


となっている。この章題からも予想されるように、智顗の前期時代の「次第禅門」から始まり、晩年の「維摩経疏」に至る十数部の現存文献を取り扱っている。そして「行の体系」と「実相」という天台教学の中心課題を軸に、それぞれの撰述の特色を浮き彫りにし、それによって智顗の思想展開のあとを、確実な手法をもって解明している。

まず第一章において、「次第禅門」と「方等三昧行法」を取りあげる。これらは智顗の瓦官寺在住時代の講述であるが、まず「次第禅門」については、天台の三種止観のうち漸次止観の体系を明らかにしたものとされていることは云うまでもないが、著者はここにあらわされる「行の体系」の特色を息→色→心と進む禅法にあると把え、修禅における息・色の客観的方法と心の主観的方法という質的相違が、際立って浮き出ていると主張する。そしてこの息・色・心の順序で修せられる次第観を基調とするのが、「次第禅門」のみならず智顗の初期修禅体系であるという。つぎに「実相」については、法心章(「次第禅門」巻一下)を中心に追求している。ここで著者は「次第禅門」の実相

論を「無執著の立場の実践主体における確立が行＝修禅の究極の目標である、との見解がはっきりと示されている」から、「一切法のあり方の究極相が無自性・空である様を教示している、とみられよう。」という（61ページ）。

以上が著者の「次第禅門」の「行の体系」と「実相」に対する主要な見解であるが、このような解釈をみると、著者は後期にはっきりと見られる三観・三諦の思想を念頭におきながらも、「次第禅門」のみに盛られている果実を選び出し、それを適確に位置づけるよう努力を傾けていることがよくわかる。

つぎに「方等三昧行法」については、すでにこの書が智顗の撰述とみなされることに疑問を提出されている（佐藤哲英「天台大師の研究」）が、著者は本書の内容吟味を通して智顗初期の講述とみて差し支えないことを論証し、この点にかなりの紙数を費している。しかし著者の主眼はこの書のもつ実践論と実相論の追求にあり、結論的には「方等三昧行法」の思想内容を「次第禅門」と同質の無自性・空を説く実相論と位置づけているが、実践論に関しては、懺悔法と坐禅の総合化を「次第禅門」以上に企図せられており、のち「摩訶止観」に明かされる半行半坐三昧の原初的形式を呈示していると評価している。

第二章においては、「法華三昧懺儀」「方等懺法」「六妙法門」が取り扱われ、これらの諸撰述にあらわれた新しい実践観と実相論を中心に研究されている。まず実践観についていえば、「法華三昧懺儀」では、㈠正観といわれる坐禅が方法的に〝観心〟を基本とすること、したがって法華三昧の中心が、究極的には観心に徹することであるという。具体的には、礼佛などの事行も観心に支えられる行法であり、さらに観心も心源を観察し尽くし、その不生不滅すなわち空なるありようを観得することである点を強調している。㈡したがって「次第禅門」に見られたような息→色→心という次第観とは構造を異にする不次第観の確立をはかるという、新たな修行形式を呈示するに至る、という。これはまさしく初期実践形態から新しい局面を開拓していった智顗の思想形成といえる、と著者は見ている。

「方等懺法」については、先の「方等三昧行法」が行の基本として息→色→心の順序で次第観を明かすに対し、ここでは同じく方等三昧を教示しながらも、行の基本を「観心」に見出そうとしている点を指摘し、構造的に「法華三昧懺儀」に共通しているという。また行の始めから観心に基礎をおくから、「方等懺法」では不次第観の立場に立つと解釈する。

「六妙法門」については、㈠これも行の基本は「観心」にあること、㈡古来この書は不定観を説いたものとされて来たが、実は不定観を一つの行法として「随便宜六妙門」及び四種証相中の「互証」に紹介されているに過ぎず、これを行の究極の形式としているのではない、ということ、㈢「三大部」に見られる五十二位の行位論とほぼ同じ構成の行位論が見出されること、などを挙げて詳細に論証している。

このように、以上三書に共通した実践論は、「観心」に基礎をおくことであり、この「観心」の方法を重視する根拠として、一切法は心より生ずるという思想的立場を挙げている。またこ

れら三書に見られる実相論は、無自性・空ということであり、これは初期の「次第禅門」や「方等三昧行法」の場合と同じ構造を示している。したがってこの三書を同質の内的思想を有するものとして、一つのグループと考えることができるという。

第三章においては「覚意三昧」「法界次第初門」「小止観」の三書をあげている。これらはいずれもその成立時期が、天台山隠棲前後の頃と予想され、思想内容としては三諦・三観の思想を提起し、これを整理してゆく段階という点に特徴が見られるという。

まず「覚意三昧」においては、その実践論として四運心を紹介しているが、この内的構造は「自性の否定」→「名字の法の凝視」→「名字の法の否定」→「それら両者の偏向なき観得」(249ページ)へと推論されてゆくことであり、ここに天台のいわゆる三観思想が見てとれるという。もっとも「三大部」に見られる三観の思想とは質的に異なるけれども、従前の空観に徹しようとする実践理念から新しい実践の方向を見出していったと考えられている。そしてこの三観(三諦)思想は瓔珞経の三観を汲み取って導入されたものであり、三諦よりも三観主導型であると指摘している。

「法界次第初門」においては、さらに四諦を手掛りとして蔵・通・別・円の教判論が見られ、諸経論に説かれる真理を価値的に識別してゆくという全く新しい教学思想を呈示する。ここには三観・三諦の思想と直接的な関係を見ることはできないが、四教と三観の間には有機的な関係があるのではないかと推論している。

「小止観」については、従来この書が前期の「次第禅門」と後期の「摩訶止観」の中間にあって、智顗の止観体系が確立せられてゆく一つの過渡的な段階を示すものとして注目せられて来ており、そのために本書は種々の角度から研究せられて来ている。著者はこれらの諸研究をふまえ、本書に見られる止観体系の構造、「次第禅門」との比較を通しての止観体系の成立過程、さらに三観・三諦説の成立に関する諸問題、などを論じている。この中で著者は止観の体系や三観・三諦説を形式的側面よりもその内面的構造に着目し、その成立過程を吟味している点が注目される。

第四章では「三大部」を一括して取り扱っている。「三大部」は智顗教学の最高結実と謳われて来たのみならず、天台宗学の根本聖典とされているものである。したがって従来、いろいろな角度からこの三書に対する研究が重ねられているが、著者は「三大部」を前の諸章と同じく、「行の体系」と「実相」の内面構造を掘り起こす点に努力を傾けている。

まず「行の体系」について著者が主張するところは、ほぼつぎの諸点に要約されよう。

㈠十観・十境という秩序体系をもって、能観・所観の有機的な関係を明らかにし、整理していったところに、智顗の教学的関心の究極を見ることができる。

㈡この十観・十境という実践体系の内面的構造は「観心」に基礎をおくものである。それは十境のうち第一陰入界境を実践

上の観境として行人が選ぶ場合に識陰＝心にきわまること、及び他の九境がいずれも観心論を補強するものであること、から明らかである。

㈢この「観心にきわまる」ことの思想的根拠として、存在論的解釈と唯心論的解釈の両面から考察できる。存在論的解釈とは、一切法を衆生法によせて述べる場合で、いわゆる十如是の三転読に示される空仮中としてのあり方を意味する。著者はこれを「一法の例外もゆるさず、まさに等しく空であり仮であり中である一切法のあり方を明そうと意図して企てられたものであった」（403ページ）と断定し、しかもこれが一切法を推究する形式を「観心」に帰着せしめる理論的根拠であると主張する。一方、唯心論的解釈とは一切法を心法によせて明されることをいい、「遊心法界」に対する智顗の解釈を手掛りとして、著者は一切法は心より生ぜしめられたものであり、一切法の存在の根拠を心にみるというのであるから、方法的に「観心」の形式をとるのは何ら不思議ではないという。かくて以上二種の解釈を総合し、「観心」の実践的有効性を明らかにしたのだという。

さらに著者は「観心」の方法が、一心三観にきわまる理由についても詳細に論じているが、ここでの紹介は省略する。

つぎに「三大部」に示された「実相」の表現形式を概念的表白と直接的表白に分け、十如・十二因縁・四諦・三諦・二諦は前者に、一念三千・一諦・無諦は後者に属するという。そして概念的表白の特質を十如と三諦、とりわけ「仮」の問題を中心に論及し、直接的表白の場合を一念三千の教説を中心に吟味を進めている。中でも「仮」をめぐる問題に関して著者は、智顗の把握した仮は、三論宗によって厳しく批判せられた成実家の仮の教説と深いつながりがある、と指摘していることは注目される。そして著者は以上の両種の表現形式を実相表白の有効性による相違とし、前者を方便、後者を実とする摩訶止観によって、その有効性を価値的に整理しようとする姿勢があると見ている。

第五章では晩年の撰述である「維摩経」の註釈書を取り上げている。そしてこれらは「三大部」と本質的には変らないが、とくに実相論に関して三諦よりも一諦に力点をおくようになる経過を明らかにしてゆく。

## 三

本書を通読して強く印象づけられる第一の点は、「三大部」以前の諸撰述、すなわち智顗の瓦官寺時代から天台山隠棲時代にかけての諸撰述に関する研究が、全体の五分の三を占めていることである。このことは著者が、智顗の思想が円熟するに至るまでの長い思索・修行の過程に、とりわけ大きな関心を抱いていることを示している。著者ははしがきに「これまでの智顗の研究史を眺めてみると、「三大部」中心に傾斜しがちであったということは否めない。智顗の教学思想を集約的に陳述してみせる書物が「三大部」であってみれば、それへの傾斜はもちろん意味のないことではないけれども、しかしそれは一夜にして形成されるものではない。それが世に送り出されるまでには

長い思索の経過があるわけであり、それはそうしたものの背景の上に花開かせたものにほかならない。そうであれば、智顗の思索の動向を最初期から時代を追って眺めながら、思索の高まりの過程を辿るということにも意味があろうというものである。」と述べている。たしかに智顗の研究についていえば、湛然以来「三大部」に重点がおかれ、またここに天台教学の核心が網羅されているとして、天台宗学の教学体系の基礎を「三大部」に求めて来た。しかし戦後における智顗教学の研究は、思想家としての智顗に迫ろうとする傾向が著しく、そのため、智顗の佛教思想を広く中国佛教史の上でとらえるようになって来ている。したがって六朝期以来の般若学や禅学の流れとの関係で智顗の思想を見直そうとしたり、あるいは智顗の撰述とされて来た文献にあらためて実証的な吟味を施そうとする研究が目立って来たのである。と同時に、このような智顗研究の傾向は、智顗を「三大部」中心でなく、従来比較的軽視せられていた彼の前期時代(天台隠棲時代を含む)の諸撰述にも強い関心を払われるようになって来たのである。本書は以上の如き天台学界の現状の中から生れたものといって差支えないであろう。

つぎに第二の点は、智顗のもつ「思想の構造的性格」に着目し、ここに研究の焦点をおいて智顗の諸撰述に取り組んでいることである。具体的には智顗教学の「行の体系」と「実相」という天台学の二本柱をテーマとし、各著作ごとにその二つの思想構造を追求してゆく。そしてその結果として引き出されて来る智顗の思索の動向や経過が浮き彫りにされて来る、という方法を採用しているのである。

このような研究方法に依ったために、本書にはとくに三大部以前の智顗の諸撰述の研究に、著者の苦心のあとがにじみ出ている。それは、三大部以前の現存諸撰述は主として実践論を明かしたものであり、実相に関する理論研究は極めて乏しいからである。智顗は30歳代に法華経題や智度論の講義をしたと伝えられているから、この時期にも「実相」の研究は進んでいたと予想されるが、残念ながら今日その内容を明らかにすることはできない。こういう状況下にあって、著者が本書において智顗の前期乃至中間期に属する撰述の思想表現を吟味し、ねばっこくその頃の実相論を看取しようとした努力には敬服すべきであろう。

ともあれ、著者が本書において智顗研究の新しい方法論を提起し、思想の内部構造に迫ろうとしたことは重要である。智顗教学が広く佛教学・哲学の研究対象になると、その研究方法にも多様な可能性がある筈である。したがってこれからの智顗研究にとっては、その研究方法をめぐる問題がいろいろな角度から議論せられねばならないのではないかと思われるのである。そういった時期にあたって、著者がこのたび本書を公刊され、智顗教学の研究に新しい方法論をもって発表されたことは、今後の天台研究の動向に重大な影響を与えることになるであろう。

(昭五六年二月　平楽寺書店　A5版　六二五頁　索引一五頁　九、五〇〇円)